

「都市と緑のより良い関係を求めて―宇治都市緑化植物公園を素材に一」

平成25年1月25日(金)午後2時半より、天満橋ドーンセンターにて上記研修会が教室満席の参加者のもとに開かれた。はじめに挨拶に立たった当センター清水理事長から、研修会の狙いとして、「都市の中に緑が増えてきたことなどもあって緑が話題になることが少ないように思うが、決して満足できる状態ではない。もっと必要性などを訴え、都市緑化の浸透を図る必要がある。このため本日の研修会では、宇治市の都市緑化植物公園を材料として、緑化推進の力となる都市緑化植物園の課題と今後の方向を探りたい」との趣旨説明があった。続いて当センター理事で㈱空間創研会長の吉田昌弘氏から、宇治都市緑化植物公園の計画設計の工夫、整備工事等の苦労話、今後の方向についてのお話があり、さらに当センター理事で前植物公園長の本間和枝氏から、この植物公園の維持管理や運営のエピソードを、い

ずれもスライドや手元の紙資料を使って丁寧に解説いただいた。

吉田氏からは、もともと計画地が急傾斜地で土壌も悪く、入口の設定、動線・土地利用計画に頭を使ったこと、また風景演出に苦労したこと、その結果、市の予算を大幅に超える事業となったことなどが説明され、計画設計の難しさ、市当局との折衝のご苦労が目に見えようであった。

一方、結果的に吉田氏の会社が設計した植物公園の管理責任者となられた本間氏からは、花の導入に関する対応(当初、来場者から花が少ないとのクレームが多く寄せられたそうである)、土壌改良の苦労、指定管理者となつてからの経営面での努力、運営の工夫などについて、具体的にパワーポイントを使っての報告があった。そのポイントをいくつかあげると、時代の中で植物園の社会的役割が変化してきたこと、今は、自然・植物と付き合える子育て、生物多様性時代の園芸のあり方、集客の方法などが重要との指摘があり、それぞれ問題点・課題と解決の方向性について詳しく説明があり、聴衆一同、感動し納得したご講演であった。

記録者としては、京都府宇治の植物園であることから、植物の文化史についての多様な取り組みが特に興味深かった。

最後に、会場の参加者との質疑応答があり、楽しくまた充実した研修会となった。吉田昌弘様、本間和枝様、本当にありがとうございました。

(糸谷 正俊)



花のタペストリー(本間先生の資料)



吉田氏計画のフローリストタウンのスケッチ

通常総会

平成24年6月22日午後5時から、プリムローズ大阪にて平成24年度通常総会を開催した。正会員65名の内過半数の43名の出席となり、本総会は成立し、清水理事長を議長として、提案された平成23年度事業報告および決算報告書、平成24年度事業計画案および収支・支出予算案ならびに総会議決事項の委任は原案通り可決された。総会終了後、鳥取環境大学教授の中橋文夫理事より、「東日本大震災修復計画における緑の柔構造都市の課題」について講演があった。

編集後記

今年1月の研修会では、会場でのアンケートを行った。今回の研修会に対して「設計者と管理者双方の立場から施設の実態を聞けたという評価とともに、施工者の話も聞きたかった。」いろいろな立場から話を聞きたいという気持ちが変わってきた。また今後希望するテーマとして「庭園見学」が1位、2位には「造園緑化への技術的提案」3位「近年の主な都市公園施策、都市公園の将来」で「お茶会への参加心得、作法」が上位に入った。ぜひ「庭園見学ノート」を持って「お茶会」やってみてくださいね。

◎ ご入会の案内

当センターは都市緑化への協力に努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨にご賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10,000円	10,000円
団体正会員	50,000円	30,000円
賛助会員	30,000円	20,000円
友の会	免除	3,000円

◎ ご寄付のお願い

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆様のご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げます。

◎ ご寄付

匿名：1,300,000円

◎ 新入会員のご紹介

友の会：佐々木 利一

NPO法人 国際造園研究センター

〒540-0021 大阪市中央区大手通14-2 大手通第三ビル202号
TEL/FAX：06-6944-2040 http://www.klrs.org/

NPO法人

国際造園研究センター会報

No. 10
2013
6月発行

NPO国際造園研究センター
10周年記念

庭園見学ノート

39箇所の庭園を掲載
を発刊しました！

平成15年、センター設立当時から庭園部会で進めていました好評の庭園見学会で見学したうち、39箇所の庭園の見学ノートが完成しました。

庭園見学会に参加された方はご存知と思いますが、NPO国際造園研究センターゆえの清水理事長および京都市の吉田庭園部会長ならではの企画で、当日飛込みでは決して参観できない箇所もあり、また、講師のきめ細かい思いがけない解説だけでなく、庭園を管理されておられる部所の担当の方の専門的な観点からの説明など、施設のいわれや管理のご苦労など普段では聞けないことなど案内していただく機会にも恵まれました。部会の主旨からもこの見学は会員だけでなく一般の方の参加がたぶんに見られ、そのときの感触を各担当で書き上げました。

西芳寺、天龍寺の作庭に係わった夢窓国師、二条城や桂離宮、御所の庭などの作事を担当した小堀遠州。野村別邸(碧雲荘)や無鄰庵の七代目植治(小川治兵衛)など著名な作庭家の技を、また、それを今見せるに耐える技術の継承のすばらしさも垣間見る機会を満喫しました。



松琴亭前の白川橋付近

私事です…銀閣寺の項で、「義政が最も心酔していた西芳寺からの略奪の記録はないものの、仙洞御所や室町の花の御所、鹿苑寺からさえ(名石、名木など)一度ならず持ち出している。」と。これは鹿苑寺すなわち金閣寺にも同様記載されていますが、以前読んだ図書に義政が金閣寺から10数石の名石を持ち出したとの記述に、その石が銀閣寺の庭のどこに配石されたのか、名石ゆえその石のなくなった金閣寺の庭の取まりに欠けるような、充足されない何かがあるのではないかと心配しました。

このように時代を経て、その時代を生きてきた人達のさまざまな営為を受け止め、図面に落とせない微妙な作為あり、また大胆にその姿が変わっていく様と、そ

の謎解きに立ち会えたときの面白さはなにものにも換えられない庭園見学の醍醐味です。あとがきにもあるように、庭園を鑑賞する際、2倍も5倍も楽しめる「知見の詰まった引き出し」にこのノートがなってもらえること、これが庭園見学で「自分だけの新しい引き出し」作りになってもらえればこの上ない気持ちです。

これからも庭園部会では見学会は続けていきますが、設立時の主旨を生かし、①本ノートに目を通し、もう一度謎解きに足を運び、②本ノートの謎解きのための新たな庭園の見学を行います。また、③今話題になっているニュース性のある新しい庭・緑景観を訪問を考えています。その見学ノートも参加した皆さんの引き出しからも提供していただく予定です。

執筆者は、清水正之(元大阪芸大教授)、篠沢健太(工学院大学教授)、田中明夫(㈱田中造園土木 代表取締役)、中橋文夫(鳥取環境大学教授)、服部明世(元(財)都市緑化技術開発機構 理事長)、吉田昌弘((一社)ランドスケープコンサルタント協会顧問)《敬称略》と私、繁村誠人(元大阪府南部公園事務所長)です。

まずはご一読を…！

(繁村 誠人)



庭園見学ノート



松琴亭にて吉田講師の説明風景

国際造園研究センターの設立10周年記念事業として、研修部会と国際部会の合同で中国の造園視察ツアーを実施しました。日程は平成24年年6月3日から7日まで、参加者は清水正之理事長ほか計4名です。行き先は、中国北京および山西省大同市です。順不同で要所について記します。北京では、ごく普通の公園をみるということで、北海公園と什利海公園(前海)へ、前海一帯には胡同という古い町並みが広がっています。湖水の周囲が薄皮のように公園になっていて周辺の洒落れたショップやカフェと公園の境界は不明瞭で両者が一体となっています。さっそく湖岸の席を確保してのどを潤しました。また、北京の定番ということで、故宮と天壇公園へ行きました。建造物と広場と通路などの雄大な空間スケールを実感しました。天壇公園は有料区域が普通区域と中心部の二段階になっています。普通区域では、多くのグループが太極拳や演舞などを練習あるいは披露しており、また多くの人々がそれを見物して楽しんでいました。その賑やかなこと。彼の地の公園利用の一面をみました。

大同への行きは飛行機、帰りは夜行寝台車を使いました。現在、大同市では旧市街地の再開発と新都市建設計画をセットでおこなっています。2008年にやり手の市長が赴任して以来、大改造が始まりました(2013年に山西省の省都太原市の市長に転任しましたが、そのときには”市長行かないで！！”という引き留め運動があったそうです)。旧市街地内でもとの城壁の位置1.8km四方に城壁を新しく建設しています。城壁に登るとさながら時代映画のセットのようでした。城壁の上を自転車で回れます。城壁の区域内にあった建物はほとんどを壊して、明代を模した町並みを建設しています。古い時代からあった華嚴寺、善化寺などを中心に、周囲に広場、道路・通路、店舗、食堂など観光施設を設けています。旧市街の東側数キロに新都市を建設して、旧市街の住居や事務所等を移転しています。20階以上の高層住宅が林立していま



大同市文瀾湖生態公園の植栽デザイン



大同市文瀾湖生態公園の水辺デッキ
段差高が60cmもあり水に近づくのに苦労する

す。住民は、以前の住居より面積が割り増しされた近代的なところに住めるというので喜んでいとのことです。この新都市に隣接して中央公園として、文瀾湖生態公園が建設されています。数年前までに一旦干上がっていた貯水池に再導水して、周辺を含めて268ヘクタールの公園で、樹木が無かった平坦地に人工的に高低をつけ、多量の高木、低木、草本が植栽されています。中国の緑地は、幾何学的に園路と広場を配置し単純な植栽のものが多いのですが、この公園は従来の方式と異なり、歩行動線を考慮した大小の曲線直線の園路が配置され、高木、低木、草本、地被を組み合わせた植栽デザインでした。岸辺の各所で、柳、ガマ、ミソハギなどが長さ50メートル以上にわたって植栽された湿地が作られています。中国の緑地の計画・設計において大きな変化がおきていると感じました。



雲崗石窟第20窟 釈迦坐像 高さ13.7m

雲崗石窟は、北魏時代の石窟群で、日本の歴史や美術の教科書にも載っています。断崖1km程にわたって約40の石窟が並んでいます。彩色が残っているものや剥落したものなど様々でした。砂岩を彫り込んだ大小さまざまな石窟と仏像をガイドの案内つきで見学しました。石窟部分は、慎重に取り扱われていますが、ここ3年で、周囲は大規模にテーマパーク化されています。入り口から釈迦の生涯を表す石造オブジェをたどりつつ園地と建物が配置され、石窟まで半時間程歩きます。有料の電気自動車に乗ることもできます。ここでも高木、低木、草本が多量に新規植栽されて鬱蒼とした森林状態になっています。シルクロードにつらなる砂漠の石窟を想像して訪れた人は戸惑うかもしれません。出口付近には土産物屋の店舗と屋台が並んでいます。市街地中心部から石窟まで20km程ありますが、道路の周辺にも密に植栽されています。残念なことにそれが周辺の眺望を遮断していました。

NPO緑の地球ネットワーク(前中はその代表)が建設中の「緑の地球環境センター」を見学し、食事しました。23ヘクタールの敷地で緑化協力用の苗木を自前生産するほか、多様な緑化樹種の生態植林見本園を設けています。緑化

実践地として、20年間に面積5500ヘクタールで1880万本を植えた地球環境林プロジェクトの一部や、村のアンズ果樹園造成に協力して、その結果が現金収入に結びつき豊かになった村も訪れました。村中に広がるアンズ果樹園に”我要脱貧”(我々は貧乏を抜け出さねばならない)と看板がたっていました。

明時代の万里の長城や狼煙台や堡壘と呼ばれる軍隊の駐屯地などが各地に残っています。城壁、見張り台、古井戸、練兵場などが廃墟状態で、現地の人々にはまったく無視されていますが、悠久の歴史が感じられました。また、北京での北京ダック、大同での羊のシャブシャブや羊蝎子(ヤンシエズ、煮込んだ骨にへばりついている肉を食べる)など地方色ある料理も楽しみました。それぞれの土地の条件や生活をどのように造園に結びつけるかということで、示唆の多い旅でした。



NPO緑の地球ネットワークによるモンゴリマツの緑化地
植栽後11年で高さ3mを越えた

緑の柔構造都市の創造を目指して

中橋 文夫

造園学会の東日本大震災被災調査に参加し、壊滅した防潮林を見て、阪神・淡路大震災被災時にひらめいた「緑の構造計算」の必要性を深めた。倒壊する家屋を街路樹が支え道路を守り、延焼を公園の樹木が止めた。緑が都市の緩衝帯の役目を果たし、都市の柔構造化に寄与したと鳥取環境大学の紀要に書く⁽¹⁾、清水理事長から総会時に講演をと賜り恐縮した。

「建築・土木には構造力学があるのに造園にはない」という疑問を、かねてより抱いていた。被災地に飛び、海岸部は津波に、丘陵部は地滑りで襲われた現状を見て思いは深まり、課題を整理した。

まず上げられるのは海岸・町・丘陵部・山などの自然林・人工林・生産緑地・公園緑地・海浜林などが市街化により寸断されていることから、これらを繋ぐ「流域を捉えた体系的な緑地計画」が必要である。特に海岸部においては縄文地図から原風景を読み解き、長年風雪に耐えた小高い自然林の復元が有効とアースダイバーが指摘する⁽²⁾。

学問の師匠である片寄俊秀先生は長崎水害を経験され、早くから、しのぎの防災論を展開された。自然災害には逆らうことなく「かわし・いなし・さばき・受け流す技術を磨け」とご教示賜った。

三十路代に大阪府営深北緑地の設計を担当させていただき、豪雨時に寝屋川が警戒水位を越え、氾濫すべき水が深北緑地の越流堰を越え、緑地内に濁音を轟かせ流入する光景を思い出した。地域を水害から守ったのだ。これこそ「かわす」技術の真髄ではなかろうか。こうした技術を参考にして、津波対策を講じていかねばならない。

10mを超える津波に防潮林は機能しないと聞くが果たしてそうだろうか。皿根のアカマツ林は倒木していたが、狐塚神社のマツは残り、防潮林のモデルをみた。ならば「樹種・規格・密度が異なる1/10程度の模型をつくり、造波プールで津波を当て、耐えうる樹林地構造を見出せばよい。」リバーフロント財団が、河川敷に生えている樹木の増水時の引き倒し実験を行っている⁽³⁾。津波対策も机上計算を実験で検証していかねばならない。

このように大地の記憶、自然の技、科学的実験に緑の柔構造都市のヒントが隠されている。



津波に耐えた狐塚神社

- 【参考文献】(1)中橋文夫(2012)「東日本大震災復興計画における緑の柔構造都市の射程」『鳥取環境大学紀要第9号・10号合併号』
(2)中沢新一(2005)「アースダイバー」講談社
(3)(財)リバーフロント整備センター(1999)「河川における樹木管理の手引きp82-177」山海堂

NPO国際造園研究センター
事務所移転のお知らせ

2012年10月より以下の住所に移転しました。移転につき、電話番号等も変更しました。今後とも変わらぬお引き立てを賜りますようお願い申し上げます。

〒540-0021 大阪市中央区大手通1-4-2 大手通第三ビル202号 TEL/FAX：06-6944-2040